



TITLE:

随想

AUTHOR(S):

CITATION:

随想. 人文 2007, 54: 1-12

ISSUE DATE:

2007-06-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/50623>

RIGHT:

「随想」のようなもの

坂井セシル

好きなことを書いてください、と言われた時には嬉しかった。なにせ、学業が宿題の山、山、山にしか見えない今日このごろ、自由な課題で随筆のようなものを「人文」に書かせていただけるとは、願ってもないことである。しかし、そこで、急に不安にかられた。好きなと言われても、所詮読んでもらうために書く訳だから、あまり独りよがりなことを書いても意味がない。どんな主題を選ぶべきか。そこで、凡庸だが、つかの間の京都人としての京都礼賛にやはり落ち着くことにした。

たまたま王寺賢太氏に貸してもらった笹野頼子の「居場所もなかった」をとて面白く読んだ。それは大都会東京で、幾度も失敗しながらも、しつこくオートロックの安い部屋を探すあの私という女性（笹野自身）が語る、妄想、閉鎖、実存主義的な不安などが不動産の嘘とともに、限りなく連動して行く終わりのない話である。さて、どうしてこれまでも東京になれそめなかったのか、という素朴な疑問に対して、以下数行の説明がある。



「関西人の私に、東京は東北の南端なのだ。というより関東全体が北国としか、思えなかった。(…)京都の景色に、というよりたまたま下宿していた極めて京都らしい一画の中で、寺院の塀や植え込みに囲まれた視界に慣れ過ぎてしまっていたのだった」。そこでは四畳半風呂無しの住居に雪と湯豆腐を加えてしまえば、独居の退屈もなにか意味あり気になる。軽いものならば風邪や喉痛や鬱にも似た気分までが贅沢に変わる。なるほど、熱帯夜に窓を開けられずに、部屋全体に畳のワラのむれた臭いが立ち籠める辛い日もあったが、それでも花曇りも底冷えも盆地の夏も、寺院の佇まいや徒歩でいくらでも見に行ける美術品や、いつも幻の中にいるような哲学に適した街並みの前では、舞台効果のようなものになってしまったのだ。長年、無為を思索に変えてくれる街で暮らしていた。」(講談社、一九九三、講談社文庫、一九九八、三一―三二ページ、いずれも絶版)

が、それでも塞ぎ込むようになった、と続くのだが、このさすがに作家らしい京都寸評は、ストーリーに一瞬の美しさを添えるだけではなく、短期的に京都在住を経験している一読者としての私に深い感銘を与えてくれた。無為を思索に変えてくれる街とは、まさに京都、すくなくとも外部(東京、パリ)から見た京都である。第一に時間がまったく違う形で流れているような、従来の区切りが消滅してしまったような、雰囲気につ



た。

例えばこんな時。某四条通りのふとん屋で経験した会話。

「このお店古いんですか。

——まあ。

——昭和ですか。

——いやあ。

——大正ですか。

——いやあ。

——すると、明治ですか。

——いやあ、もっと前やね。

——えつ、江戸時代ですか。

——ええ、まあ、綿を売っててねえ。」

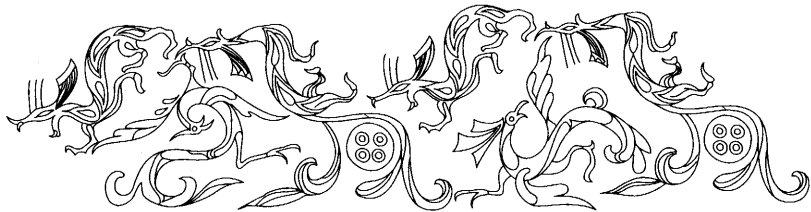
今時 founded in 1996, since 2003 などかはびこっている中、
なんたる謙遜。あるいは断固たる自信。二〇〇六年十二月二十
三日というその会話の日が限りなく相対的な期日と変貌してし
まった。他にも京都在住の友人の話では、年配の方の「こない
だの」例えば火事は、という表現はなんと応仁の乱を指すこと
がしばしばとか。なるほどと思う。大震災や空襲にあった東京
では考えられない通史的な感覚である。

実際、風景のほうも、随所に昔の面影を残している。この寺、
神社、屋敷や旧民家などが点在する町が観光の発展で当たり前
にはなっているものの、考えてみれば、過去と現代が闘ぎあう
タイムスリップの経験をそのまま提供してくれる、特別な場所



でもある。妙心寺の迷路に迷い、自分も江戸化してしまいそんな感覚に襲われたと思ったら、次の角では東映映画の撮影の真っ最中で、俳優さんたちが何度も監督の指示に従って同じ（他愛もない）シーンを演じていた。あるいは金閣寺。改めてその美しさに感動し、三島作品やらを思い浮かべていると、どこかかと五〇人あまりの写真家集団がやってきて、一斉に写真をとりに始めた。全員初老の男性で、ハンチングのような服装に身をまとい、ものすごく高度な高級カメラの作業に熱中していた。引退後の何とかカメラ愛好家クラブの人たちは黙々と何千枚もの金閣寺の写真を延々と撮り続けた。被写体の金閣寺は、といえば、やはり艶やかにそびえ、なされるがままにしていた。

文豪谷崎潤一郎は京都が好きで、長く住み、永住するつもりでいた。実際そのお墓は銀閣寺に近い法然院というところであり、自分で選んだ天然石に自分で書いた寂という字を刻ませて、そこを夫人とともに永眠の地とした。自分の老衰、そして死というものをアイロニーたっぷりに演出したのが小説「瘋癲老人日記」（一九六一―一九六二）で、私も数年前に、そのフランス語の改訳に携わったため、その凄まじい生命力を身近に感じた以来、京都に寄れば、必ず一度はお墓参りに行くのだが、それは今でも、谷崎は永眠のふりをしながら、どこかで目を光らせているような幻想が無意識的にも翻訳の仕事の原動力となっているからかも知れない。ということ、今度もお伺いした訳だが、不思議なことにお墓のすぐ横には名刺入れの箱がある。実



はずっと前からファンのため？に、その箱は設置されていて、私も何度か名刺を置いてきた。言うまでもなく、何の音沙汰もなし、であつたが。しかし、今回は名刺を置いて来なかつた。それは、このような儀式はおかしいというような覺めた考へがあつたからではない。ただ、今回の四ヶ月の京都滞在で使つてしまひ、名刺が切れてしまつたからである。それだけが、亡くなつた文豪のための一枚のほうちが、他の何十枚の名刺よりも、意味があるのかもしれないと思つた。

後世に残るものと残らないものの中には微妙な差を思いながら、歸途につく。しかし笹野説では京都が無為を思索に変えるという。ならば、本当にありがたい街に住んでいる人がうらやましい。つかの間であつたとは言へ、こんな幻／フィクションのような場所で、数ヶ月、人文科学研究所の研究員として過ごせたことは幸運であつた。ありがたい気持ちでいっぱいだ。さて、無為な研究のほうは思索に変貌し得るのか。パリに戻つてからの新たな宿題である。



変貌するドイツの大学

ラインハルト・エメリヒ

(富谷 至訳)

二〇〇六年九月から翌二〇〇七年二月まで、私は京都大学人文科学研究所客員教授としての光栄に浴した。学内行政面での義務は何もなく、実に刺激的な環境のもとで半年間、自身の研究に没頭できたばかりでなく、研究班への参加の機会、日本人の学生に対する講義、尊敬する同僚との忌憚らない談論は、楽しさを彌増するものだった。私が自分の目で見た印象と、語り合ったことの一つは、日本の大学が、今日、大きな変革期に遭遇しているということである。これは、ドイツの大学にあっても同じい。そこで、私は、以下に変わりつつあるドイツの大学に関して、あらまし考えのいくつかを述べてみよう。主としてそれは人文科学に関してである。

伝統的制度の特色

(1) ドイツの大学は、ウィルヘルム・フォン・フンボルト(一七六七―一八三五)の二つの連関する理想に負っている。一つは、教育と研究は根底にあつて互いに結びついていなければ



ならないということ、今ひとつは、大学において研究と学業は、なんであれ現実的な目的の下に置かれるべきではないということである。一九世紀にあつては、ドイツの大学の大学を実りあるものにした根底に横たわつていたかかるフンボルトの理想は、基本的には人文科学に限定されていたこと、言うまでもない。またかかる理想を引き継ぐ大学のシステムはごく少数の人間だけが大学に入学することを前提として、はじめて機能すること論をまたない。事実、第二次世界大戦まで、二〇世紀の前半の何十年間にわたつて、大学に入学したのは、各世代の五%を超えなかったのである。

(2) ドイツの大学は異なつた、固有の特色を有する傾向にはあるものの、教授と学生、および一般大衆の眼からみれば、大学は質においてあまり差がないと考えられている。アメリカ、日本で極めて自然となつてゐる大学間の格差ランキングは、伝統的なドイツのシステムには、縁のないものであつた。そこには、主として四つの理由があろう。

一は、最近に至るまで、ドイツには私立大学というものは無かつたこと。二は、大学間には、給料の格差がほとんど無かつたこと。三は、大学に入るには、各大学が実施する試験によるのではなく、選抜試験としては、高等学校での順位 (Abitur) をもとに、大学自身ではなく他の第三者機関によつて決定されるということ。そして、全体として多くのドイツの大学の質に差がないその第四の理由は、ごく最近にいたるまで授業料は概

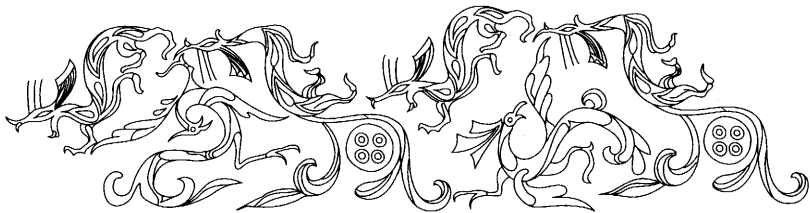


ね払わなくてよかったという事実にも因っている。ドイツの大学が均質である結果として、明確に格付けが為されている国でそうであるように、学生は大学の名声に憧れて来るのではなく、自分の適性能力にしたがって選択をおこなうことになる。

(3) ドイツでは、大学に入学するまでに、学生は、小学・中高等学校で一三年間を経ねばならない。普通の学生の入学年齢は、二十歳、男子学生は高校卒業と大学入学の間に兵役もしくは社会奉仕があるが故、少し年がたってからと言うことになる。ドイツの大学入学年齢は、他のヨーロッパの国々に比べて相対的に高いといつてよい。人文科学はどの分野も高度な専門性を有するが、伝統的に学生は、主専攻1、副専攻2を取らねばならず、五年もしくは六年の就学期間をへて単位取得認定となる。もし、学生に博士学位(PhD)を目指そうというほどの意欲があれば、高度に専門的な学問をさらに三年から五年間続けねばならない。

挑 戦

(1) かく概観した理想的なドイツの大学は、ある前提条件があつて始めて成立すること、言うまでもない。前提条件の第一は、教授と学生双方が、外部からとやかく言われることなく、自分たちのすべきことに真摯に専念するという、積極的な気持ちをもっていることである。次に言えるのは、教授と学生の数がうまくバランスのとれた状態があつてはじめて、研究と教育、教授と学生の間に理想的な緊密関係が生じるということである。



残念なことに、一九七〇年代以降、このバランスが大きく崩れてきたのである、つまり、以前にまして、より多くの若者が大学に入学しだしたのである。この傾向に対して、大学の教員をそれに相應して増加させることで、調整するということは、今日にいたるまで、なされないままである。さしあたり、アメリカのエリート大学アイビリーグでは、教授一人に対しておよそ一〇人の学生、対して平均的なドイツの大学では教授一人にたいして五〇人から一〇〇人の学生という比率であり、人文科学にあっては、教授一人に対する学生の数はそれよりもっと多い。統計学という外挿法（既知の数値からの推定）によれば、ドイツの大学で今日二〇〇万人と算定される学生数は、向こう一〇年の間に、三五パーセントの増加となる。しかし、そこには、教員の増員の計画はない。大学を拡張するかわりに、独政府は教育の収容力を外国に「買い求める」と言ったことすら考えている。

（２） だいたい一九九〇年以來、大学入学の各世代の数のパーセンテージがドイツでは三六％にまで増加している。ただ、この比率はまだ低すぎると、しばしば指摘されてはいる。

事実、OECD（経済開発協力機構）加盟の先進国三〇カ国の平均比率（五三％）を下回り、アイスランド八三％、ニュージーランド八一％、スウェーデン八〇％といった国には、及びもつかない。

（３） これまでのドイツの大学のシステムからは、「大卒」



があまりにも少ないとの主張は、甘受せざるをえない。先に述べたごとき自由さゆえに、何人かのいうよりも、おそらくは多きにすぎるとも言える学生は、卒業せずに大学にとどまる。卒業して大学を去る学生の数、ここ二〇年の間に増加して、現在は各年代の二一％に上ってはいるが、それでもOECDの平均三二％には、とうてい及ばない。

(4) 一九九三年、EU(欧州連合)として結成された二七国のグループは、それぞれの国には文化的多様性があるべきだが、連合は、ヨーロッパの文化的、政治的、経済的生活において、ある分野において多様な思想の調和をはかるという確認——「*In variate concordia* 多様性の統合」という銘を掲げて——が調印された。中でも主たる分野は教育であり、何人かの政治指導者は、ヨーロッパ内の教育の多様性、とりわけ大学内のそれが、一般的にEUとして不利益をもたらすと考えたのである。その結果、いわゆるボローニャ協定において、学期、就学年数、そして試験の難度と評価段階を統一することを合意した。これによって、ヨーロッパ内でのヨーロッパ学生の流動性、競争原理、さらには国際的雇用を高揚することをめざしたのである。

ボローニャ協定によって規定された過程、もはやその齒車を逆転させることはできないように思われる。そしてそれは既述の伝統的ドイツの大学には革命的影響をあたえることになる。(1)修士課程(MA)は、最初の高レベルの単位取得ではなくな



り、かわって全ての学生は、MAを目指すことが認められる前に、学士(BA)と称される一段下の単位取得認定を経ねばならない。(2)BA単位取得の就学期間は、短縮され、カリキュラムは実学関連の科目に集約されるであろう。(3)大部分の学生は、BAを取得してしまえば、大学をはなれ、ごく少数のグループだけが、MAとして残ることが許されることになる。(4)これからのヨーロッパの学生は、少なくとも二、三校の大学で学ぶべきものとされ、個性的な指導者もユニークなテストもなく、もはやフンボルトの理想に従うのではなくして、ただただ実学のみを学ぶことになる。

(5)ヨーロッパ、とりわけドイツにおいては、これまでのシステムには、競争が欠如しているという確信が大きくなってきた。畢竟、大学に市場原理を適用することがだんだん顕著になってきたことが、目につく。概して言えば、ある大学が多くの予算を獲得すれば、それだけその大学の重要性が増すと見なされる。これは、同時に大学内部での競争においても当てはまり、ある学部が多くの予算を獲得すればそれだけ、その構成員が重宝されるということに他ならない。

人文学への挑戦

以上、述べてきた挑戦は、とりわけ人文科学にとって脅威であること、容易に理解できるであろう。

(1) 人文科学という学問がどういうものかというのは、他の学問分野にくらべて、明確ではなく、人文科学の教授は、言



葉の真的意味において研究者とは考えられていない場合が、しばしばである。

(2) 人文科学を専攻した学生の学んできたことが将来どう生かされるのかは、自然科学や工学を卒業した学生の将来よりも不確かである。

(3) 他の分野の学生と比べて、人文科学出身の学生の方が、学問をやめてしまう者がおおい。

(4) 財団等から獲得した予算の額が優秀さの指標として見なされる限り、人文科学が申請する額が常に自然科学における申請額よりはるかに少ないがゆえ、人文科学の立場は低い。

ドイツにおいて我々が直面している大学改革は、何十年ものあいだドイツの大学を支えてきた人文科学にとって脅威となっている。より正確に言えば、人文科学のある分野では、一層の危機に面している。それらは、いくつかの大学で、たった一人か二人しか教授がいない領域であり、しばしばそれらの領域は非ヨーロッパ文化に関するところに他ならない。多くの大学は、次第にこうした領域を廃止しつつあり、不幸なことに、研究者や大学教授の中においてさえ、次の様な考えをもつ者がいる。ヨーロッパが世界文化の発祥であり、したがって非ヨーロッパを研究しそれを教えるといったようなことは、ヨーロッパの大学はする必要などなく、他に任せておけばよい。かかるヨーロッパ中心主義の再来が長続きしないことを願ってやまない。

